

# 可換偏微分作用素環の構成と Abel多様体上の層のFourier変換について

神戸大自然科学 中屋敷 厚  
(Nakayashiki Atsushi)

## §0 背景

可換常微分作用素環(CDO's)を決定する問題は 100年程の歴史を持ち(c.f. Intro. や [2]) その研究の初めから、代数曲線と関連することが、その具体形の決定を通して示されていく (ref や [2])。これら初期の研究はしばらく孤立していたが、'70-'80 に発展した Soliton 理論の中で(初期の研究とは独立に)復活し、CDO's を決定する問題は、決定的な進歩を遂げることになった。すなわち、Novikov S.P. Krichever I. Drinfeld V. Mumford D. その他の人々等の研究を経て、1989年 Mulase M. によって、CDO's の "geometric objects" による分類が完成された。この "geometric objects" の詳しい研究又は、深い意味は、これから的研究で明らかにされていくであろうと期待される。CDO's の具体形を決

定する問題について分かれることは、rank  $\geq 2$  の場合は、非常に少ない。(rank  $\approx$  対応する geometric object の一部である sheaf の rank) (c.f. [5] and ref. of [5]).

ここでは、話を高次元化することを目的とする種の geometric objects から、可換偏微分作用素環 (CPDO's) を構成する 1 つの一般的方法を示す。

## §1 例と概念

例  $y^2 = 4x^3 - g_2x - g_3$  を椭円曲線

$f(x)$  を Weierstrass の  $1^\circ$ -関数

( $f'(x)^2 = 4f(x)^3 - g_2f(x) - g_3$  を満たす)

$$P = \left(\frac{d}{dx}\right)^2 - 2f(x)$$

$$Q = \left(\frac{d}{dx}\right)^3 - 3f(x)\frac{d}{dx} - \frac{3}{2}f'(x)$$

とする。と、

$$[P, Q] = 0$$

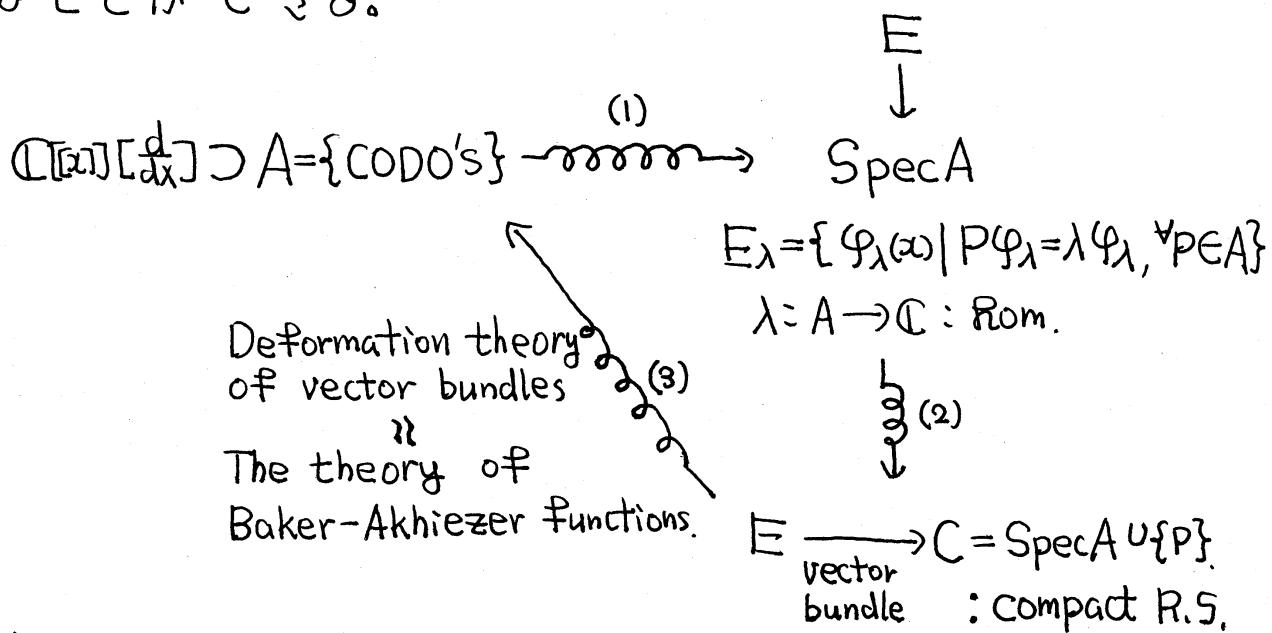
$$(2Q)^2 = 4P^3 - g_2P - g_3$$

$$\{R \in \mathbb{C}[[x]][\frac{d}{dx}] \mid [R, P] = 0\} \subset \mathbb{C}[P, Q]$$

最後の式は、左辺が「可換環」となり、右辺と同型であることを意味する。特に、 $\mathbb{C}[P, Q]$  は极大可換偏微分作用

用素環である。

さて、可換常微分作用素環と、Geometryとの関係は、非常に単純化して言うと次のような図にまとめることができ。きる。



意味

(1):  $A$  の同時固有関数を考えることで "Spec  $A$ " 上の sheaf を構成する。

(2): コンパクト化。

(3): geometric objects から  $\overset{C}{YODOS}$  の構成。概念的には、ここが一番 non-trivial な process で、以下は、この部分の高次元への拡張である。

## §2 Baker-Akhiezer (BA)-module

以下語はすべて複素数体  $\mathbb{C}$  上とする。

$X = \mathbb{V}/\Gamma$ : abelian var.  $V: \mathbb{C}$ -vect. space,  $V \supset \Gamma$ : lattice

$\hat{X} = \bar{V}/\Gamma^*$ : the dual abelian var.  $\bar{V}^* = \text{Hom}_{\mathbb{C}\text{-anti-linear}}(V, \mathbb{C})$

$\Gamma^* = \{\mathfrak{f} \in V^* \mid \text{Im } \mathfrak{f}(\gamma) \in \mathbb{Z}, \forall \gamma \in \Gamma\}$ ,

$P$ : the Poincaré bundle s.t.  $P_0 \cong 1_{\hat{X}}$   $P_{\hat{0}} \cong 1_X$

ここで、 $P_x = P|_{\{x\} \times \hat{X}}$ ,  $P_{\hat{x}} = P|_{X \times \{x\}}$  とおく。

$X^\dagger = \{(P_x, \nabla) \mid \nabla: P_x \rightarrow P_x \otimes \Omega_{\hat{X}}^1: \text{hol. flat connection}\} \rightarrow X$

$$(P_x, \nabla) \xrightarrow{\psi} x$$

: an affine bundle (fibre  $\cong H^0(\hat{X}, \Omega_{\hat{X}}^1)$ )

$D$ : an ample irred. divisor.

Prop.  $\exists! A_D: X - D \rightarrow X^\dagger$  : meromorphic section

s.t.  $A_D$  は、 $D$ に高々 1 位の pole しか持たない。

Cocycle によってすべてを記述することにより  $A_D$  を具体的に決定する。まず  $P$  は次の cocycle で与えられる:

$$j_P((\gamma, l), (x, y)) = e^{-\pi i \text{Im} \langle \gamma, l \rangle} \cdot e^{\pi (\langle \bar{x}, l \rangle + \langle \gamma, y \rangle) + \frac{\pi}{2} (\langle \bar{y}, l \rangle + \langle \gamma, l \rangle)}$$

$(\gamma, l) \in \Gamma \times \Gamma^*$ ,  $(x, y) \in V \times \bar{V}^*$ ,  $\langle , \rangle: V \otimes \bar{V}^* \rightarrow \mathbb{C}$  pairing

Lemma  $\Gamma$  の  $V \times \bar{V}$  への作用を次で定義する:

$$\gamma: (x, \xi) \mapsto (x + \gamma, \xi - \bar{\gamma}).$$

$$\Rightarrow X^\dagger \cong V \times \bar{V} / \Gamma$$

$$\text{証明: } V = \bigoplus_{i=1}^g \mathbb{C}e_i, \quad \bar{V}^* = \bigoplus_{i=1}^g \mathbb{C}e_i^*, \quad \langle e_i, e_j^* \rangle = \delta_{ij}$$

と base をとり、その座標を使って

$$\nabla(x, y) = dy + \pi \langle \bar{\zeta}(x), dy \rangle : P_x \rightarrow P_x \otimes \mathbb{C}\chi^1$$

と書く。また  $V \ni x = \sum_{i=1}^g x_i e_i, \quad \bar{V}^* \ni y = \sum_{i=1}^g y_i e_i^*$ ,  
 $\langle \bar{\zeta}(x), dy \rangle = \sum_{i=1}^g \bar{\zeta}_i(x) dy_i \in H^0(\bar{X}, \mathbb{C}\chi^1) \cong \bar{V}$  である。  
 $U(x, y)$  を  $V \times \bar{V}^*$  上の関数で

$$U(x+\gamma, y+\ell) = j_P((\gamma, \ell), (x, y)) U(x, y) \quad \cdots (*)$$

を満たすものとする。 $\nabla(x, y)$  が  $X^\gamma$  の section となるための必要十分条件は

$$(\nabla U)(x+\gamma, y+\ell) = j_P((\gamma, \ell), (x, y)) U(x, y) \quad \cdots (**)$$

が  $(*)$  を満たす任意の  $U$  について成り立つことである。  
 計算により

$$(\nabla U)(x+\gamma, y+\ell) = j_P((\gamma, \ell), (x, y)) (dy + \pi \langle \bar{\zeta}(x+\gamma) + \gamma, dy \rangle) U(x, y)$$

従って  $(**) \Leftrightarrow \bar{\zeta}(x+\gamma) = \bar{\zeta}(x) - \gamma$  Q.E.D.

divisor  $D$  に対応する line bundle を  $[D]$ , その Appell-Humbert の標準形で書いた cocycle を  $j_D(\gamma, x)$ , hermitian form を  $H = (h_{ij})$  とする。 $[D]$  の section と  $V$  上の関数で  $U(x+\gamma) = j_D(\gamma, x) U(x)$  と交換するものを同一視する。

Lemma  $U \in \Gamma(X, [D])$  s.t.  $(U=0) = D$  とする。

$$f_i(x) = -\frac{1}{n} \sum_{j=1}^n h^{(i)} \frac{\partial}{\partial x_j} \log u(x), \quad H^{-1} = (h^{(i)}) \quad \text{とおく。}$$

$\Rightarrow \{f_i(x)\}_{i=1}^g$  は  $X^D \rightarrow X - D$  の section である。

Remark:  $U$ は cocycle に対して unique up to const.

特に、 $(\phi_i)_{i=1}^g$  は、cocycle に対して unique である。

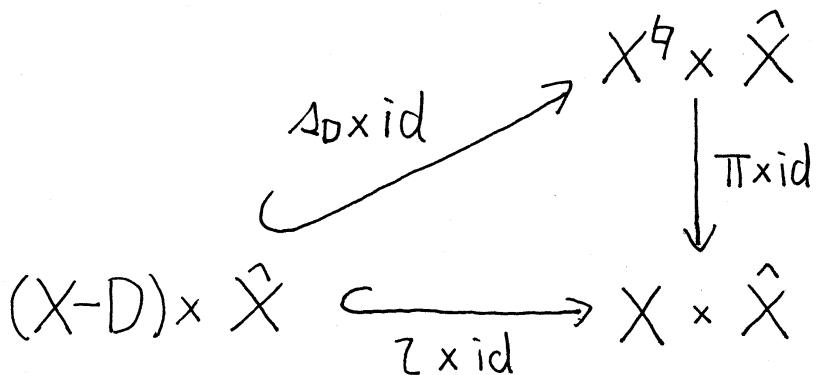
Def.  $A_D = (f_i)_{i=1}^g$  を canonical section と呼ぶ。

以上で Prop. は証明された。V 上の正則関数で  $g(x+\gamma) = g(x) - \gamma$  を満たすものは存在しないので、AD の各成分は、D に 1 位の pole を持つことが分かる。

Cor.  $\{A \mid A : X^{\sharp} \rightarrow X-D \text{ a section}\} = A_D + H^0(X-D, \mathcal{O}_X^{\oplus g}).$

### §3 $\mathcal{D}_{\hat{x}}$ -module structure on $P|_{\{x=0\} \times \hat{x}}$

$\mathfrak{D}\hat{X} = \bigcup \mathfrak{D}\hat{X}^{(n)}$  を  $\hat{X}$  上の微分作用素全体のなす環の層とする。 $\mathfrak{D}\hat{X}^{(n)}$  は  $n$  階以下の作用素のなす部分層である。次の可換図式を考える：



$\pi_1, \pi_2$  はそれぞれ自然な projection, injection である。 $X \times \hat{X}$  の定義から,  $(\pi_1 \times \text{id})^* P$  には自然な  $\mathcal{O}_{\hat{X}}$ -module の構造が入る。従って上の可換図式より,  $(\pi_2 \times \text{id})^* P$  は自然に  $\mathcal{O}_{\hat{X}}$ -module となる。

以下  $\pi_i$  ( $i=1, 2$ ) を  $X \times \hat{X}$  から 第  $i$  成分への projection とする。

Def.  $F$  を coherent  $\mathcal{O}_X$ -module,  $F(*D) = \varinjlim_n F \otimes \mathcal{O}_X(nD)$  とする。この時  $\hat{X}$  上の  $\mathcal{O}_{\hat{X}}$ -module を

$$\mathcal{F}(X, D, F) = \pi_{2*}(\pi_1^* F(*D) \otimes P)$$

で定義する。ただし  $\mathcal{O}_{\hat{X}}$ -module の構造は  $(\pi_2 \times \text{id})^* P$  から誇導されたもので入る。 $\mathcal{F}(X, D, F)$  を 3つ組  $(X, D, F)$  の Baker-Akhiezer (BA)-module と呼ぶ。

Remark (1)  $A = H^0(X-D, \mathcal{O}_X)$  を  $X$  の affine 環とする。定義から  $\mathcal{F}(X, D, F)$  は左  $\mathcal{O}_{\hat{X}}$ , 右  $A$ -bimodule である。

$$(2) \mathcal{F}(X, D, F)(n) = \pi_{2*}(\pi_1^* F(nD) \otimes P)$$

$\mathcal{O}_{\hat{X}}(k) \mathcal{F}(X, D, F)(n) \subset \mathcal{F}(X, D, F)(n+k)$  がすべての  $n, k$  について成り立つ。

## §4 BA-module の構造と CPDO's

以下  $(F, D)$  は “ $\text{Tor}_1^{\mathcal{O}_X}(F, \mathcal{O}_D) = 0$ ,  $D$  は non-singular” を満たすとする。 $\text{gr } \mathcal{F}(X, D, F) = \bigoplus_n \text{gr}_n \mathcal{F}(X, D, F)$

$\text{gr}_m \mathcal{F}(X, D, F) = \frac{\mathcal{F}(X, D, F)^{(m)}}{\mathcal{F}(X, D, F)^{(m-1)}}$  とおく。

Theorem 1.  $\text{gr} \mathcal{F}(X, D, F)$  は coherent  $\text{gr}\mathcal{O}_X$ -module である。

特に  $\mathcal{F}(X, D, F)$  は coherent  $\mathcal{O}_X$ -module となる。又  $N_F \in \mathbb{Z}$  を  $H^i(X, F_{\hat{x}}(n)) = 0 \quad \forall i \geq 1 \quad \forall \hat{x} \in \hat{X} \quad \forall n \geq N_F - 1$  を満たすものとする。 $\text{gr} \mathcal{F}(X, D, F)$  は  $\text{gr}\mathcal{O}_{\hat{x}}$  上  $\bigoplus_{n=-\infty}^{N_F+g-1} \text{gr}_n \mathcal{F}(X, D, F)$  で生成される。ここで  $F_{\hat{x}}(n) = P_{\hat{x}} \otimes F \otimes \mathcal{O}_X(nD)$ 。

CPDO's に対応する 3 つ組  $(X, D, F)$  のクラスを設定する。

Def.  $(X, D, F)$  が type(CC) for  $\hat{x} \in \hat{X}$  とは

- (1)  $H^i(X, F_{\hat{x}}) = 0 \quad \forall i \geq 0$
- (2)  $H^i(X, F_{\hat{x}}(-k)) = 0 \quad \forall i \geq 1 \quad \forall k \geq 1$
- (3)  $H^i(X, F_{\hat{x}}(-k)) = 0 \quad \forall i \neq g \quad \forall k \geq 1$

が成り立つ時をいう。

Theorem 2.  $(X, D, F)$  を type(CC) for  $\hat{x} \in \hat{X}$  とし  $r = \text{rank } F$  とする。又  $\text{gr} \mathcal{F}(X, D, F)$  は rank  $r \cdot D^g$  の quasi-free  $\text{gr}\mathcal{O}_{\hat{x}, \hat{x}}$  module である。特に  $\mathcal{F}(X, D, F)$  は rank  $r \cdot D^g$  の free  $\mathcal{O}_{\hat{x}, \hat{x}}$  module である。さらに  $\text{gr} \mathcal{F}(X, D, F)$  は  $\bigoplus_{n=1}^g \text{gr}_n \mathcal{F}(X, D, F)$  で  $\text{gr}\mathcal{O}_{\hat{x}, \hat{x}}$  上 生成される。ここで  $D^g$  は  $D$  の  $g$  回自己交点数,  $g = \dim X$  である。

また  $L$ . complex manifold 上の graded  $\text{gr}\mathcal{O}_X$  module  $M$  が quasi-free であるとは, graded module として

$$\exists \{a_i\}, M \cong \bigoplus \text{gr}_{\mathcal{O}_Z}(a_i) \quad \text{gr}_n \mathcal{O}_Z(a_i) = \text{gr}_{n+a_i} \mathcal{O}_Z$$

なる同型がある場合を言う。

Cor. Theorem 2と同じ条件を仮定し  $A_{X,D} = H^0(X-D, \mathcal{O}_X)$  とおく。 $\{U_i\}_{i=1}^N$  ( $N=r \cdot D^d$ ) を  $\mathcal{O}(X, D, F)_Z$  の 1つのかなえ free base とする。 $\Phi = {}^t(U_1, \dots, U_N)$  とおく。この時

$$\mathbb{E}_{\Phi} : A_{X,D} \longrightarrow \text{Mat}(N \times N, \mathcal{O}_{X,Z})$$

を  $\Phi \Psi = \mathbb{E}_{\Phi}(\Phi) \Psi$  ( $\Psi \in A_{X,D}$ ) で定義すると、 $\mathbb{E}_{\Phi}$  は ring monomorphism となる。

$\mathbb{E}_{\Phi}(A_{X,D})$  は、可換偏微分作用素環である。

Theorem 3. Th. 2 及び Cor. と同じ状況を仮定する。

$\lambda : A_{X,D} \rightarrow \mathbb{C}$  を ring hom. とする。同時に固有値方程式系（このままで local に考える）

$$m_{\lambda} : \mathbb{E}_{\Phi}(\Phi)^t (v_i)_{i=1}^N = \lambda \Phi^t (v_i)_{i=1}^N \quad \Phi \in A_{X,D}$$

の characteristic variety  $SS(m_{\lambda})$  は zero section である。

### §5 Type (CC) の例。

Mukai M. による Fourier 変換の定義を復習する([1])。 $\mathcal{O}_X$ -module の category から  $\mathcal{O}_X$ -module の categoryへの functor  $\hat{\Phi}$  を

$$\hat{\Phi}(F) = \pi_{2*}(\pi_1^* F \otimes P), \quad F : \mathcal{O}_X\text{-module}$$

で定義する。

Def. (Mukai)  $F$  を coherent  $\mathcal{O}_X$ -module とする。

$F$  に対して W.I.T of index  $i$  が成り立つとは,  $R^i\hat{\phi}(F)=0$  が  $\forall i$  について成り立つ時を言う。又,  $F$  に対して I.T. of index  $i$  が成り立つとは,  $H^i(X, F_{\hat{x}})=0$  が  $\forall i, \forall \hat{x} \in \hat{X}$  について成り立つ場合を言う。 $F$  に対して W.I.T or I.T of index  $i$  が成り立つ時,  $\hat{F} := R^i\hat{\phi}F$  を  $F$  の Fourier 変換と呼ぶ。

### Example (Homogeneous vector bundle)

$F$  が homog. vect. bdl. とは, 次の同値な条件(1) 及び(2) が成り立つ時を言う:

(1)  $T_x^*F \cong F \quad \forall x \in X$ , ここで  $T_x : X \rightarrow X$  は  $y \mapsto x+y$ .

(2)  $F$  に対して W.I.T of index  $g = \dim X$  が成り立ち,  $\text{Supp } \hat{F}$  は有限個の点にある。

Prop.  $H$  を homog. vect. bdl.,  $D$  を non-sing ample irred. divisor,  $\hat{x} \notin \text{Supp } \hat{H}$  とする。この時

(1)  $(X, D, H)$  は type (CC) for  $\hat{x}$ .

$$(2) \text{gr } \hat{\phi}(X, D, F) \hat{\wedge} \bigoplus_{i=1}^g (\text{gr } \hat{\phi}_{\hat{X}, \hat{x}}(-i))^{\bigoplus b_i^{(g)}}$$

$$b_i^{(g)} = \frac{r \cdot D^g}{g!} a_i^{(g)}, \quad a_n^{(g)} = n^g - (n-1)^g - \sum_{k=1}^{n-1} a_k^{(g)} \cdot g H_{n-k}, \quad a_1^{(g)} = 1.$$

$\# H_r$  は  $g$  コから  $r$  コ取る重複組合せの数。

### Example (Picard bundle)

$C$  を genus  $g$  の compact Riemann surface,  $P$  を  $C$  の 1 点,  $X$  を  $C$  の Jacobian variety とする。 $X$  の主偏極により,  $X$  と  $\hat{X}$  とは canonical に同型である。 $C$  の  $\hat{X}$  への埋め込みを 1 つ固定する。 $n \in \mathbb{Z}_{<0}$  ならば,  $\mathcal{O}_C(nP)$  に対して I.T. of index 1 が成り立つので,  $F_n := \widehat{\mathcal{O}_C(nP)}$  は vector bundle であり rank  $g-n-1$  の Picard bundle と呼ぶ。

Prop.  $F_n$  を Picard bundle,  $D_{\mathbb{R}}$  を  $\mathbb{R} \oplus$  と linearly equivalent な non-singular irreducible divisor,  $-\hat{\lambda} \notin C$  とする。ここで  $\oplus$  は  $X$  の主偏極とする。 $g+n \neq 0$  とする。この時

(1)  $(X, D_{\mathbb{R}}, F_n)$  は type (CC) for  $\hat{\lambda}$ .

$$(2) \text{gr } \oplus(X, D_{\mathbb{R}}, F_n) \cong \bigoplus_{i=1}^g (\text{gr } \oplus_{\hat{X}, \hat{\lambda}}(-i))^{\oplus C_i^{(g, n, \mathbb{R})}}$$

$$C_m^{(g, n, \mathbb{R})} = r \mathbb{R}^g \cdot (m^g - (m-1)^g) + g \mathbb{R}^{g-1} \cdot (m^{g-1} - (m-1)^{g-1}) - \sum_{j=1}^{m-1} C_j^{(g, n, \mathbb{R})} \cdot g H_{m-j}$$

$$C_1^{(g, n, \mathbb{R})} = r \mathbb{R}^g + g \mathbb{R}^{g-1}, \quad r = g - n - 1.$$

## References

- [1] S. Mukai : Duality between  $D(X)$  and  $D(\hat{X})$  with its application to Picard sheaves, Nagoya Math. J. Vol. **81** (1981) 153-175.
- [2] M. Mulase : Category of Vector Bundles on Algebraic Curves and Infinite Dimensional Grassmannians, Intern. J. of Math. **1** (1990) 293-342
- [3] A. Nakayashiki : Structure of Baker-Akhiezer Modules of Principally Polarized Abelian Varieties, Commuting Partial Differential Operators and Associated Integrable Systems, Duke Math. J. Vol. **62** No. 2 (1991) 315-358
- [4] A. Nakayashiki : Commuting Partial Differential Operators and Vector Bundles over Abelian Varieties, to appear in Amer. J. Math.
- [5] E. Previato and G. Wilson : Vector Bundles over Curves and Solutions of the KP equations, Proc. Sympo. Pure Math. **49**, AMS, (1989) 553-569